



市民の声を市政に反映
杉森ひろゆき
 市議会議員ニュース

杉森弘之後援会広報委員会発行
S21号 2020年9月1日
 〒300-1235 牛久市刈谷町1-41-8
 Tel・Fax : 870-0335
 携帯 : 090-5587-7693
 Mail : sugimori@max.hi-ho.ne.jp

日商が「攻めの検査」を提言

コロナ感染対策

日本・東京商工会議所は7月28日、「活動再開の基礎的インフラである検査体制の拡充と医療提供体制の安定化に向けて」の提言を発表した。参考のため一部掲載する。

1. 「数値目標」と「時間軸」の早期明示を

(1) PCR検査「攻めの検査」の実施

有症状者への迅速なPCR検査の実施とともに、無症状でも感染リスクの高い場所に存在する者や入国者等を対象に徹底的に検査することで感染源を早期特定し、広く接触者を早期に追跡・隔離することで二次感染を防止する、いわゆる「攻めの検査」は、感染者の早期発見や重症者の抑制に大きな効果が期待できる。

「攻めの検査」で早期発見された軽症・無症状の陽性者を民間宿泊療養施設等で計画的に隔離することができれば、重症者への対応が求められる医療機関への負荷の軽減が期待できる。

「攻めの検査」で市中感染リスクの低減が図られれば、国民や事業者は過度に萎縮することなく、社会経済活動を行うことが可能となる。

牛久市議会第3回定例会

杉森議員の一般質問

傍聴のご案内

杉森議員が下記の日時と内容で、一般質問を行います。ぜひ傍聴に来てください。

【日時】9月7日(月)午後1時

【内容】新型コロナウイルス感染対策＝生活の困窮と支援のための諸施策

日本のPCRが進まぬ理由

日本の一般の疫学の方がやっけるのは感染経路からどうなるのかという予想に基づいたクワスターを潰していく理論疫学だが、近年、遺伝子工学が発展し、ロシユが「大量検査、大量隔離」という新しいトレンドを作り出し、それが世界の感染疫学の主流になった。日本はこの流れに取り残されているため、PCR検査を増やすことに反対する意見が出た。

(児玉龍彦・東大名誉教授)

(2) PCR検査のフロー化 アクションプランの「見える化」

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会において、「感染拡大した場合に想定される必要な国全体の検査ニーズを国民に明らかにし、検査体制を拡充する」との基本的な考え・戦略が示されている。現在、自治体が地域の検査ニーズ等を精査しているが、これらを整理・統合し、想定される感染拡大に対し、機動的に検査体制と医療提供体制を強化できる具体的な数値目標と時間軸を盛り込んだアクションプランを8月初めにも示し、国民と事業者の不安払拭を図りたい。インフルエンザ流行時(1日10万人超の新規患者が想定)を見据え、1日10~20万件の検査体制が必要との指摘もあり、感染拡大が懸念される秋までに計画的に検査体制と医療提供体制を拡充されたい。

なお、感染疑いのある人を見つけ出す抗原検査や、感染初期か回復期かを診る検査、感染時の重症化予測をする検査、既往歴を見る抗体検査、確定診断としてのPCR検査をフロー化し、目的に合った検査体制を確立・拡充していくことが効果的である。

ワクチンは感染症を防げるか①

たんぽぽ舎のメールマガジンに、「ワクチンは感染症を防ぐことができるのか」と題して、船瀬俊介著「ワクチンの罫」を紹介する浜島高治さんの記事が掲載されました。参考のため、上下連載で転載します。

◇前書き：

- ・ワクチンは「劇薬」／100種近い「有毒成分」を含む／「後遺症」
- ・「死亡」が続発／感染症を防ぐことはできない／ワクチンは「生物兵器」／「獣の血」でつくられている／子宮頸がんワクチンのウソ
- ・ウイルスは無関係だとFDAが公表／子宮頸がんワクチンの目的／
- ・ポリオ・ワクチン—32年間、患者ゼロでも強行／日本脳炎ワクチン
- ・1年で患者3人、副作用の危険は1億倍／ジフテリア・ワクチン
- ・接種で患者が3千倍に爆発増／種痘が「天然痘」を大流行させた
- ・『ジェンナー神話』の捏造／「人工ウイルス」のマッチポンプ

予防接種の父 ジェンナーの大罪

ジェンナーが生きた18世紀の欧州では天然痘が猛威を振るっていた。ある時彼は、牛痘(牛痘ウイルスによる感染症)にかかった人は、以降、天然痘にかからないということに気付いた。

そこで1795年、彼は8歳の少年に、牛痘にかかった乳しぼり農婦のおどきの膿を接種した。6週間後、今度はこの少年に天然痘を接種したところ、少年は発病しなかった。

ジェンナーは「膿の中の何かが、少年の体内で天然痘を防いだ」と判断。

当時は、ルイ・パスツールが細菌を発見する100年近く前である。病原体の存在すら知られておらず、免疫反応も知られていなかった。

これがワクチンの起源。教科書には、ジェン

ナーが天然痘を撲滅したとある。

ところが次の批判もある；「ジェンナーが仕掛けた罫が、天然痘撲滅というウソを産み、“ワクチン信仰”を確立させた」(『医学と健康』2008.12.22号)。果たして本当は？

種痘が原因で天然痘猛威 独・英が相次ぎ種痘禁止

ジェンナーの種痘法は、英国をはじめ欧州各国で熱狂的に受け入れられた。欧州のすべての幼児が牛痘接種を受けるようになった。

ところが意に反して1800年代後半、欧州で天然痘は収まるどころか爆発的に流行することとなった。1870年から71年にかけては、**ドイツ国内だけで100万人以上が罹患、1年で12万人が死亡した**。そして驚くべきことに、そのうち**96%が種痘を受けていた**。種痘を受けなかった人はわずか4%。

このデータから、種痘は天然痘を防ぐどころか、爆発的流行の原因になっていたことが分かる。当時のドイツ宰相**ビスマルク**は、各洲政府に緊急通達を送った：「おびただしい数の**天然痘患者は、種痘が原因**である。“天然痘を予防する”という牛痘接種は偽りである」。

英国でも同様の悲劇が起った。種痘が全土に広まったとたん天然痘が流行し、たちまち2万人近くが死亡。流行は毎年拡大し、ついに1872年には**死者44,480人**に達する。それでも国家による強制種痘が続行された。

拒否する者は刑務所に入れられた。おびただしい犠牲者を出し続けながら、ようやく1948年、英国政府は種痘を禁止した。

日本も強制種痘で被害

明治維新、文明開化に浮かれる日本人に、このような悲劇はまったく届かなかった。ワクチン利権に目をつけた**ロックフェラー財団などの医療マフィア**が、情報を徹底的に隠蔽したからだ。
(次号につづく)